

「茶旅」  
”こぼればなし”

(23) マレーシア 磚茶をタンチャと読むのはなぜ？

コラムニスト 須賀 努



久しぶりにマレーシアに行き、東海岸をのんびりとバスで旅した。東海岸はマレー系が特に多く住む地域で、朝からモスクのお祈りの大音響が聞こえてくる。今回はお茶とは関係のない旅のはずだが、何となくマレーシアのお茶事情をリサーチしてしまった。

マレーシアの茶畑は、かのカメラロンドンハイランドのポーターが有名だろう。イギリス植民地時代に開発され、輸出用に紅茶が作られた場所だ。以前2回訪れているが、最近はそのマレー人が観光に訪れているのが目を惹いた。首都クアラルンプールから車で4-5時間、標高1800mと涼しいことから、避暑地としての人気は

高いが、マレー人の所得が上がり、家族を乗せたマイカーでここを訪れ、素晴らしい景色を堪能、ついでに香りの高い、高級紅茶を飲んで帰る、こんな光景が目には焼き付いている。これはインドのダーズリンなどでも見られる、いわゆる中産階級の勃興に依じて、見られる行動パターンだった。

それとは対照的なのが、昔ながらの中華系食堂。まるで時間が止まったような感覚にとらわれる、古びた外観。シンガポールのお隣、橋を渡る。ここはマレーシアという街がある。ここはマレーシアというより、完全にシンガポール。週末ともなれば物価の安いこの街にシンガポール人が押し寄せてくる。

そのローカル食堂で海南チキンライスを食べながら、何気なく『茶』と書かれている。既に60歳代かと思われるオーナー夫婦は私を中国人と思いつき、『熱茶』と言いつつ、プラスチックのコップにお茶を淹れてくれた。1杯1.5マレーシアリングギット(約38円)。因みに店員が若者、特にマレー人であれば、ほぼ100%『Tea』と言えば、ポーターの砂糖・ミルク入りアイスティーを持つてくるだろう。南国マレーシアではアイスが主流であるが、このアイスもいつから使われたのか気になる。

壁に貼られたメニューを見ると『Tea』という表示が見えた。夫妻の出身地は海南島だという。海南島なら『Tea』ではなく、『Cha』ではないのかと問うと、昔からマレーシアではこう書いているという返事。やはりマレーシアに最初に移住してきた人々は福建系だったからだろうか。先日あるカメラマンから『福建省が



ジョホールバルで飲んだタンチャ

Teaで広東省がChaであることをビジュアルに写真に撮れるところはないか?』と聞かれたのを思い出す。発音を写真に収めるなど、無理に決まっていると言ってしまったが、この店のメニューをぜひ推薦したいと思う。ところでオーナーはお茶を『タンチャ』と発音しているように聞こえたが、一体何茶なのか?これは味から

して黒茶系、基本的にある年代以上の華人はこの茶を飲んでいてと説明された。既に本誌の昨年12月号で、広西壮族自治区蒼梧県で作られる六堡茶が華人に好まれている様子をお伝えしているので、これはレストラ用の低級茶だと推測された。

しかしそれをなぜ『タンチャ』というのか。実は日本のお茶関係の本を読んでいる以前から気になっていたのが、磚茶をタンチャと表記しているものが見られることだった。今の日本語には『センチャ』という読みしかないはずなのに、不思議でならなかった。勿論『煎茶』との混同を避けるためとも考えたが、どうもしっくりこない。中国語(標準語)の『ジュアンチャ』が訛ったとも考えにくい。

これは表記上の問題ではなく、実際に現地を訪れた茶旅の先達が直接その耳で聞いてそれを文章にする際、表記したとは考えられないだろうか。だがこれが何語なのかは、オーナー

夫妻も首を横に振るばかり。日本の辞書に『タンチャ』とも読む、と書かれているものもあり、『団茶』つまり茶の塊から来ているとの説も見られた。確かに六堡茶を含めた黒茶はブロック型やお椀型など、団茶であるので、これはビタリとはまっている。標準語では『ドウアンチャ』だから、『タンチャ』にかなり近い。

よくお茶の伝播には海と陸の2つのルートがあり、広東系が『チャ』、福建系が『ティー』だと説明されているが、本当にそんなに単純なものなのだろうか。この『タンチャ』が何語であり、どこから伝わったのかが分かれば、少し違ったお茶の流れが見えるかもしれない。もしこの点について情報をお持ちの方がおられれば、是非お教えを頂ければ嬉しい。そういえば、沖縄にある谷茶ビーチはなぜ『タンチャ』と読むのかも合わせて知りたいな、と余計なことまで考えてしまった。

(すが つとむ)